

公益財団法人滋賀県陶芸の森  
杉山道夫様

## 台灣国立臺南芸術大学の派遣報告

今回、台湾の国立臺南芸術大学レジデンスの滞在と人々との交流を通じ、その長所とこの経験から得た私の制作の経過および継続を報告させていただきます。

まずこの滞在の長所として、大学内であるという環境的な良さが大きく挙げられます。なぜならば、二ヶ月間という短い滞在期間の中で、陶芸の制作を行うだけでなく、様々な情報収集が容易に出来たことです。特に今回は、学生が行う穴窯7日間の焼成の機会に立ち会うことができたことも貴重な経験でした。

それに加え、二つの大学で学生の為に講義をすることにより、自分の作品と自分の制作の経過、継続を見つめ直す機会にもなりました。

次に、私の制作の経過、継続についてです。

私は2015年から、「積層」シリーズとして薄く平らに伸ばした土を上に重ねて形をつくるという工程を続けています。これは、目に見えない時間の流れを、積み重ねる行為と焼成により視覚化するというテーマがもとになっています。

今回台湾では期間が限られていたので、行く前に何を制作したらよいかをまとめました。

- 一、今まで行っている積層シリーズの発展。(技法的なもの)
- 二、台湾でしかできないもの。(地元の土や窯から採れる灰を使い表現に加える)
- 三、もし時間が許すなら積層シリーズの変容。

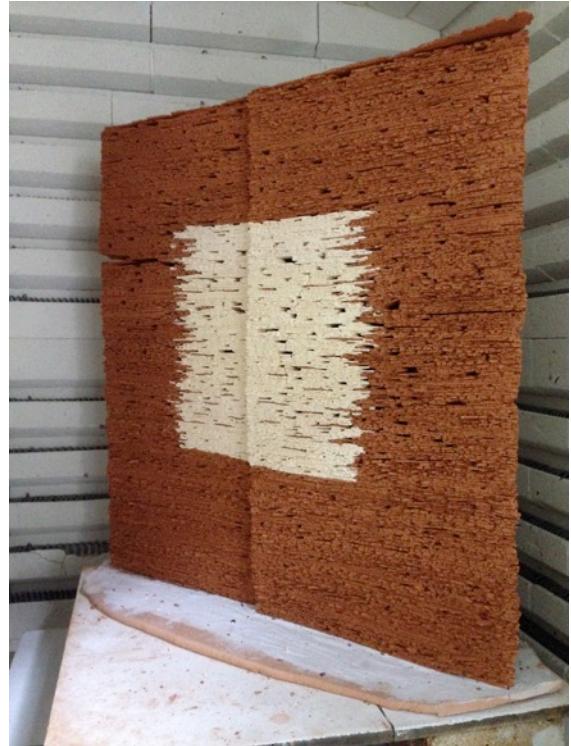
この三点が行えるように、日々の制作に向き合いました。

まず初めの2~3週間は、地元の土と穴窯で採れた灰の試作を中心に、そして同時に磁土で積層を制作する期間にあてました。この期間に7日間の穴窯に入れる制作も行っています。三点とも全て7日間の窯の焼成に耐えられる土を使い、中央のものだけ地元の土を水で溶いて表面に塗ったものです。(写真、左)写真、右は焼成後です。



次に4～6週目は、試作を通しててきた地元の土の色味から焼成温度を決定し二つ目の積層の制作に使いました。ここでは、台湾の草木の鮮やかな色が印象的であったこともあり、土地の土と磁土に黄色の粉を混ぜて作った土とを一つの形の中に融合できたらという考えのもと制作しています。(下記写真)

結果、素焼きまでは順調でしたが本焼きで形が留められませんでした。原因はいくつか考えられます。窯の中の上下の温度が均一に上がらなかった、土地の土と磁土の収縮差が、ある温度を越えると急激に変化する等です。この点を再度見直し、異なる性質の土を使う制作も発展させて行きたいです。



6～7週目は、積層シリーズの変容です。陶土を積む方向は変化させず焼成方法を変えたものを行いました。炭化焼成を取り入れています。(写真右)

これは、今まで続けてきた積層シリーズとは別の展示方法で見せる新しいものになっていく兆しが見えました。



最後に台湾では、オランダの植民地時代、日本統治時代、そして中国という歴史を持つ国との関係において、台湾とその国に住む人々が、どのように陶芸をとらえ制作をしているのかということを一部観ることができた点も、ここで学ぶ機会が与えられなければ得ることのできない貴重な経験でした。

そのことを通し、アジアからみる日本の陶芸と私が日本人として考える日本の陶芸との間に感じた差異をこれから私なりに、少しづつ理解を深め自分の制作に活かして行きたいと考えています。(上記でアジアからみるとしたのは、学内の韓国、香港、マレーシアの留学生から、それぞれの日本の陶芸の見方の差異も感じた為です)

ありがとうございました。

藤田真理乃